

宗岡二中だより 8・9月号



令和 7 年 8 月 29 日

自ら学び考える生徒

学校教育目標：心豊かな優しい生徒

明るく元気な生徒

いってきます。いってらっしゃい。

校長 伊藤大輔

今月は標題の言葉について考えます。

「いってきます。」は「行って来ます。」と表記します。行きます、そして(帰って)来ます、を省略したものと考えられています。出かける人が使う言葉です。江戸時代には「いってまいります」という言葉を使いました。そのころの旅は命がけだったので、大切な人に対して「必ず帰るから」という誓いを立てたのでしょう。「いってらっしゃい。」は「行って、(無事に)帰ってらっしゃい。」を省略したものです。送り出す人が使う言葉です。出かける人の誓いに対して、祈りを込めて応じているのです。大切な人と離れるときに、再び会うことを「誓い、祈る」あいさつです。日本語ならではの定型句であり、世界中のどの言語にも似たような表現は見つかっていません。

さて先の大戦が終わり、八十年が経過しました。戦地に向かう人は、大切な人に向けて「いってきます」や「いってまいります」という言葉を使いませんでした。どうしてでしょう。国のために命がけで戦争に向かう人が、いってきますと言って戻る意思を表すことは、弱さの証とみなされたようです。そして戦況が激しくなる中であって、戻る可能性が極めて低いのに「来ます」「参ります」と伝えることは、送り出す大切な相手を裏切る行為だと考えざるを得なかったのでしょう。よって戦争に向かう人は別れ際、「いきます」と言ったそうです。

その一方で、こんな話もあります。鹿児島の知覧(ちらん)に陸軍の特攻基地がありました。そこに多くの若者が母と慕った鳥濱(とりはま)トメさんがいます。トメさんは富屋食堂を経営してたくさんの特攻隊員を見送った人です。特攻隊とは爆装航空機による体当たり攻撃部隊のことです。終戦後のある晩

のできごとです。表戸の隙間から、一匹の大きな源氏萤(げんじぼたる)が光る尾を引きながら、すーっと店に入ってきました。娘さんたちはほとんど同時に声をあげます。「お母さーん、宮川さんよ。宮川さんが帰ってきたのよ。」宮川さんとは富屋食堂に通っていた宮川軍曹のことです。彼は特攻に飛び立つ前にトメさんに次の言葉を残しました。

小母(おば)ちゃん、おれ、心残りのことはなんにもないけれど、死んだらまた小母ちゃんのところに戻ってきたい。そうだ、この萤だ。おれ、この萤になって帰ってくるよ。いってきます。

宮川軍曹は、たとえ萤になっても、送り出すおばちゃんのもとに帰って来たかったのです。

帰る場所、そして迎える人がいる場所を持っている人は幸せです。多くの人は何気なく、「いってきます」と言って出かけます。ですから「帰る場所」があります。では、大切な人と再会できる場所があること、そして再会の約束を交わすことは当たり前のことなのでしょうか。戦中の話に触れるにつけ、そんな疑問が湧いてきました。戦後八十年。今この瞬間にも世界中で人と人とが争いを続けています。残虐で何万人もの犠牲者を出してもなお、簡単には終われない争いが続いています。

「いってきます。」「いってらっしゃい。」には、再び会うことへの誓いと祈りが込められています。大切な人と一緒にいられることの有難さを引き立たせる日本語特有の表現です。そして平和への深い願いが込められた表現でもある気がしてなりません。

二学期が始業します。言葉・笑顔・挨拶の実践に一層の磨きをかけましょう。そして力を蓄え、力を振るい、力を合わせて、宗岡二中を前に進めましょう。